

## Go to Next Stage

夏休みは、苦手教科の克服と今まで学習した範囲を復習して基礎固めをする時期です。夏休みに確実なレベルアップをしよう。

## 夏休みを制する者は

## 夏を制する者は

いよいよ待ちに待った夏休みが始まります。今回は新型コロナウイルス感染症対策での学校休業により、少しだけ短い期間になりますが、勉強をとことんやりたい人は、短いと感じるかも知れません。しかし、毎日だらだらと過ごす人は、長いと感じることでしょう。

夏休みを充実した日々にするか否かはあなた次第です。充実した日々を送るために、けじめのある生活を送ることと、暑さを乗りきる工夫をしてください。

「夏を制する者は、受験を制す」中学3年生の夏休みは、「遊」ではなく「学」の時間が多くなると思います。

部活動で勉強の遅れを気にする生徒には、部活動で培った集中力と、部活動と勉強を両立させるために努力した経験は、受験勉強でも大いに役立ちます。また、今まで頑張ってきた部活動を言い訳にすると、これまでの時間を否定することになってしまいます。今まで練習していた時間を学習に充てて、ムダに過ごしている時間がないか1日を見直してみよう。

## 生活習慣を守る

3年生は、受験生になってから初めての夏休み。同時に、まだ1、2年生の「甘え」が抜けきらない生徒も多くいます。普段は勉強に部活動にとへととです。逆に、長期休暇になったら、午前中は寝ていることがないよ

うにしましょう。寝不足は心身によくありませんが、寝すぎもよくありません。学校のある日と同じように、起床、就寝、学習時間と三点固定を心がけましょう。

悪い例ですが、中学生が非行に走る時期が夏休み中、登校拒否になる時期は夏休み明けが一番多いそうです。その一番の原因は生活習慣の乱れです。

## 夏休みの勉強法

《**国語**》 国語の文法は、きちんと勉強すれば確実に点数を取れる分野です。この夏休みを利用して文法をはじめから復習しておくことをオススメします。また、国語で何より大切なのが長文読解です。1日に30分程度どんな文章でもかまわないので読んでください。そのとき同じ文章を5回以上繰り返し読むと読解力がついてきます。

《**社会**》 教科書をよく読んで内容をノートにまとめる→問題を解く→間違えたところをおぼえる→問題を解く。この繰り返しで基礎をしっかりと固めましょう。特に教科書をよく読んで重要なところをまとめることは記述力をつける上で重要です。

《**数学**》 数学は学年ごとのまとまりより、図形・関数・方程式といった分野ごとのまとまりが大切です。自分自身で重点分野を決めてその分野ごとに徹底的に練習して、習得したら次の分野に進むという方法で行うと中途半端にならずにすみます。

《**理科**》 理科は入試問題を見てもすべての分野からまんべんなく出題される傾向が多く、問題も平易なものがほとんどです。夏休みにはまず、すべての分野の基礎をひと通りまとめて、確認のために問題集を活用しましょう。

《**英語**》 文法事項のまとめをする最後のチャンスです。不定詞や比較などの決まりごとをしっかりと確かめながら、1年から2年までの範囲をすべてまとめましょう。



一学期大清掃(7月14日)

## 俺のおもちゃ箱

子どもの頃、夏休みになる度に、ばあちゃん家に遊びに行っていた。近くにおばさんがいて面倒をみていた。遊びに行く度に喜んであれこれご馳走してくれた。俺専用のおもちゃ箱がありプラスチックの野球セットとか虫かごとかが入っていた。「すぐ遊べるように洗っておいたよ」。笑いながら言っていた。ばあちゃん家はお気に入りの場所だった。

それも小学校高学年まで。中学校に入れば部活もあったし、自然とばあちゃん家の訪問は夏休みの行事から消えていった。最後に行ったのは小5の時だったと思う。それが寂しかったのか、夏休みが近くなる度に、ばあちゃんから電話がかかってきた。母親から「たまには顔見せてこい」とも言われていた。その度に生返事をしていた。少しわずらわしくもあった。毎年そんな感じで中学、高校の夏休みを過ごし、大学生になっていた。

大学3年生の夏休みの屋敷、だらだら寝ていた俺は母親から叩き起こされた。ばあちゃんが亡くなったとのこと。おばさんがばあちゃん家を訪ねると、台所で倒れていたらしい。亡くなったのは前日の夜、くも膜下出血との事。ばあちゃんの遺体が、病院から戻るとの事で母親と妹の3人ではあちゃん家に向かう。車は俺が運転した。なんか現実感がない。母親は助手席で黙りこくっている。夕方頃、ばあちゃん家に着いて遺体と対面する。10年ぶりの対面でも、ばあちゃんは冷たくて、白くて、小さい。泣き出す母親と妹の横で、俺はぼーっとしている。涙は出てこない。(俺って冷たいのかな?)そんなことを思ったりしていた。

居たたまれなくなって庭に出てみる。庭の隅にある納屋、中に入ってみると、いろんなものが置いてある。全部、ホコリまみれ。このホコリの匂いは子どもの頃と変わらない。足元に俺のおもちゃ箱を見つける。プラスチックのバッド、ボール、虫かご。次の瞬間気付いた。これ一つもホコリが付いていない。

慌てて箱を抱えて、おばさんの所へ駆け出す。「おばさん、これ?」。おばさんは俺の聞きたい事に気付いて、「それはね、ばあちゃんが毎年、夏になると洗っていたのよ。いつまでも遊べるようになって。もうそんな年じゃないよって言ったけど聞かないのよね」。おばさんは泣いたような笑顔だった。初めて泣いた。箱を抱えて座り込んで大声で泣いた。

10年もばあちゃんは俺を待っていた。俺のおもちゃを洗いながらずっと待っていたのに、「遊びにおいで」何十回も言っていたのに、なんでこんなに人は人のことを想い続けられるんだろう。俺はそんな想いをこんな風に形にして、目の前に出してもらわないと分からない。自分が愚かな人間に思えた。

「ばあちゃん、ごめんさい」。いつでも会えるんだからと後回しにしていた、ばあちゃんがいることが当たり前だと思っていた。それがずっと続くことが当たり前だと思っていた。「ばあちゃん、ほんとにごめんさい」